

## 薬剤耐性の仕組み解明

### 福島医大のぼうこうがん研究



福島医大 医学部泌尿器科学講座の眞壁俊太（写真）らの研究チームは、ぼうこうがんの

治療薬が効きにくくなる薬剤耐性の仕組みを解明した。耐性をつくっていた原因を阻害する薬を併用することで、薬剤耐性を克服できる可能性が明らかになり、治療薬の効果を持続さ

知られている。ただ、治療を続けるうちに薬剤耐性ができて効果が持続しないことが問題になっており、さらにFGFRの一種「FGFR1」を高発現する筋層浸潤性ぼうこうがんについては、治療薬の効果や耐性が明らかになっていなかった。

眞壁氏や泌尿器科学講座の小島祥敬教授、生化学講座の西田満教授らによる研究チームは「FGFR1」を高発現する筋層浸潤性ぼうこうがんの細胞を用いて「エルダフィチニブ」の作

用を解析。その結果、治療を継続すると、がん細胞内で「MET遺伝子」が増幅し、経路を活性化させて「エルダフィチニブ」の耐性を生み出している仕組みが判明。MET阻害薬を併用すると、耐性を効果的に抑制できることが分かったという。研究成果は英国の学術誌「セルデス&ディージーズ」に掲載された。

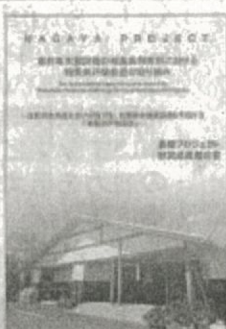
## 相馬の「長屋」研究冊子に 医大

福島医大医学部放射線健康管理学講座の研究チームは、東日本大震災後に相馬市が整備した高齢者集合住宅「相馬井戸端長屋」の入居者を対象に、市と連携して取り組んできた長期研究の結果を冊子にまとめた。

「長屋」という居住形態が高齢者の孤立防止や健康維持に効果的だったことなどを解説しており、県内外の関係機関に配布して相馬市の教訓を防災施策に役立ててもらおう。

研究チームは、市が新た

研究成果をまとめた冊子



な居住モデルとして「長屋」を整備した2012年の開設時から、その効果や課題を科学的に検証する目的で研究に着手。入居者の▽健康状態・生活機能▽外出・交流などの社会参加▽心理的安心感や孤立予防▽住環境とコミュニティ形成などの検証を続けてきた。

研究には同講座の阿部曉

樹、斎藤宏章、伊東尚美の各氏らが参加。研究代表者の坪倉正治主任教授は「行政と大学が協働し、現場に寄り添いながら、長期的に検証を続けてきた点に本研究の意義があり、得られた知見を今後の高齢者支援や地域づくりに生かしていきたい」とコメントした。

冊子は約5千部作成し、相馬市役所や保健センタ―、図書館など市内をはじめ、浜通りの関係機関、能登半島地域、南海トラフ地震防災対策推進地域指定市町村に配布する予定という。